特 100
176

特100
176

一休和尚
曾呂利
蜀山人

頓智噺

一休の幽靈問答

或時の事であつた、京都紫野大德寺の和尚或人より一の難問を起され、

「下から上に下るものは何であるか」

と問はれたには遁がの大德寺の老和尚も大に閉口して種々と考へるが怎うしても其答が能きないため、それを如何にも殘念に思ひとう〳〵それが苦になつて病を惹き起し、憐れ黄泉の客となつたが、

大正
3. 6.
内交

死しても未だ思ひが殘つて、死んでも浮ばれず、毎夜〳〵、其寺の住職となつた和尚の枕許に朦朧と姿を現はし、

「下から上へ下るもの何……」

と云つては何處ともなく姿が消え失せるのが常でありました。一休和尚が大德寺の後住職となられた其夜も、相變らず、例の幽的が姿を現はして、相も變らず、

「下から上に下るもの何……」

と言ひましたので、一休和尚は即座に、

「幽魂よ、汝、下から上に下るものが解らぬため浮べぬか。諾。去らば我れ之を示して浮ばし遣はす。

藤棚の水に寫りし花の影
下より上に下るものかな

と一首の和歌を詠ぜられたので、先住の幽魂莞爾と笑つてさも安心したと云ふ風で、其まゝツイと姿を掻消し偖て其後は絶えて姿を現はしたことはない。

二　曾呂利の蟹拜領

難攻不落と稱へられた大阪城は太閤秀吉地勢を卜し、戰略に鑑み此

地なりせば、五畿七道は言ずもがな、日本全國を統御するは此地に如く處なしと、天正十一年十一月を以て、絶大の土木を動かし築城に及ばれたのである。

外觀の宏壯無比なるは勿論、城内の美觀は一口に聚樂の城とさへ稱へし程だ何にせよ秀吉の全盛の極に達した當時である。金銀は砂礫の如くに費やし、其贅をつくしたのであるから到底其立派やかなるは完全な筆舌の形容はできぬのである。

扨ても太閤秀吉斯程の贅をつくしても猶飽足らず、文祿三年三月、豫ねて工事中であつた伏見の城が落成に及んで、此城へ愈々移る事

となつて、開處で轉城の際、種々な物品を伏見新城へ移すことに相なり、其役向の面々は目の廻る程であつたが、爰に一の新問題が生つたのは外でもない。聚樂のお城の庭の泉水の中に、殿下の贅澤心より、金銀を以て造られた數多の蟹が黑木の間や又は、水淺き處へ沈めてあるので、其蟹の背に日光が漣に映じてキラ〳〵とする、其眺めの麗はしさを、殿下殊の外御賞美あらせられたが、此度の轉城の際モー此蟹に大分飽きが來て居たので、殿下は轉城祝ひの思召を以て、近く侍べる者共に與へ彼等の喜ぶ顏を見るのも一興と思ひたゝせられ、近習の侍臣一同を御面前にと集められ、

「如何に其方等。泉水に放ち置ける金銀の蟹欲しふは思はぬか」

と仰せられるを聞た侍臣の一同口を揃へて、

「お美事なる貴とき御品、何とて欲くは思はぬ者とては、恐らく一人としてござりませぬ。されども臣等の如き微力なる者共、欲しいと存すればとて及ばぬ儀と諦め罷り居ります」

「左様であるか。然らば其方等の望みを叶へ彼の蟹を得させ遣はさぬものでもないが、蟹は顆多ありと雖限りあり。汝等臣下悉くへ分ち與へ難く、斯く致さふ。倘し予が與へたならば如何致すか、其使途の目的を申せ。其答振り予の心に適せし者に與へ遣はすであらふ」

と御諚が下つたので、一同の近臣は大喜び各自に腦漿を搾りありたけの智惠袋から引摺り出した。辯を振つて、思ひ〳〵の目的を言上に及んだ。

「愚臣は彼の蟹、幸に拜領の光榮に浴しなば大切に保存し、文鎭と致せば机上の華ともなり、傍々重寶便利の事と心得まする」

「可し。然らば一個を與へ遣はす」

「ハッ有難き仕合せにござり奉る」

まづ一人の臣下の者が口開けに一個をせしめたので、又た一人が恐

る〳〵膝を進ませ、

「願くば愚臣へも一個の御拜領の光榮を得たく幸に賜りなば、永く函入と致し大切に保存仕ります」

「罷り成らん。函入となし貯藏致さば、嘸かし蟹は窮命ならん。其方には遣はさぬぞ」

一人は御不興を蒙つて了つたので、これに懲て容易くは進み出る者はなかつたが辛と一人恐々〳〵進み出て、

「拙者は決して函入なぞに致し貯へ置きは致しませぬ。若し幸ひに賜はらば、茶釜の蓋の摘みに致したい存念。實は拙者聊か茶道を心

得居りまするで、年來の望み生涯の中に、金の茶釜とまではゆかずとも、切望ては蓋なりともと、豫ねての宿望でございました」

「可し。其方の願ひ神妙、叶へ遣はす成べく大なるを撰み持ち行け」

「ハッ有難き仕合せに存じまする」

又一人。又一人と進み出で思ひ〳〵に其使途目的を言上に及び、或は賜はり或は却けられ十幾個の蟹は、それ〴〵拜領者が決定したが孰れも其申立て平凡にして奇拔な者がないので、殿下も餘り喜び給はぬ御容子。之を見てとつた、平素氣輕な近臣の一人進み出で、

「愚臣は少々〳〵各位とは望む處相違ございますお許あるや否やは甚だ心許なふございれど、兎にも角にも言上だけは仕ります。

世の童謡に、

寢ん〳〵猫の尻に、蟹が這ひ込んだ

とか申のがございます。火のなき處に煙は立ぬ道理。滿更ら所謂なき謡でもございないかと存じ、果して猫の尻へ蟹が這込むものであらふか否やを見たく思へど、今日まで好機會とてございませぬ。幸ひ殿下より賜はらば、愚臣方の飼猫三毛に一度び試みたく存じます

る」

「なか〳〵に面白き事を申奴じや。可し二つ三つ遣はす」

と仰せあり殊の外の上機嫌。此時までも一口をも開かず神妙に差控へ居た、新左衛門の姿を殿下御覽せられ、

「其方の慾深きにも似もやらぬ。何とて所望爲さゝる。それとも其使途目的の考へとてはこれないのか」

斯く殿下よりの御督促を受けぬからぬ顔の新左衛門パックリ大口開いて、

「欲しの欲しくないのと申す段ではございませぬ。彼の蟹奴ぞくこんの執心。然はございれど、其入用使途の儀、些度大業にございます

ればお聞濟みあるまじきかと、自ら諦め差控へ居りましたる次第。

欲しいには此上もなく所望にござります」

「然程欲しきとあらば言ふて見よ。事柄に因りや叶へ遣はす」

「左樣なれば言上仕りまする。凡そ英雄豪傑が天下を討ち從へるを稱して、能く世の人は英雄天下を横行するなぞと申まする而も横行とは、言ふまでもなく、横に行くと云ふ意味で、蟹は生れながらにして、能く岸邊の砂の上を横に歩き申す。然れば彼等蟹の輩は定めて英雄豪傑であらふと存じます。就ましては此蟹共の力量の程を試し見んと存じ居るのが豫ねての宿望。さは言ふものゝ、何が偖て

古來より蟹の戰爭や又は蟹の相撲なぞ申すものこれありしを聞かず然れば這度御近習の方々拜領に及ぶ、蟹を申受は、或は角力に又は蟹合戰なぞ致させなば、定めて與多き事に存じまする。なれ共熟ら考へるに、少數の蟹にては、此望みは遂げ難しと自ら斷念致し居れど凡夫の悲しさ、潔よく諦め難ねて居りましたる處へ、有難き殿下の御懇の命を頂戴致したる次第にござります」

と口から出放題臆面もなく長たらしく喋舌たつるを殿下は呵々と打笑ひ、

「有繋は新左、汝の智辯頓才と、其圖太いには毎度ながら感心致す

蟹に合戰又は相撲を取組ませうと存じいかさま、獨り相撲や三匹四匹の蟹にては合戰もなるまじ、幾個〳〵と其數を定めんよりは、寧ろ泉水に殘りある全部を持ちゆけ」

最初から恁くあるべきことゝ、新左衛門の腹の中で豫知して居た。

さして考へる容子もなく、

「ハア這は冥加至極有難き仕合せに存じ奉る」と輕く御禮に及び、近臣十幾人で十幾個の蟹を貰つた跡の殘りは悉く曾呂利新左衛門の手に這入りましたのは、これ全く頓智智才の然らしめたとでも云ふのであります。

三　蜀山人の頓智の袈裟

神田須田町の青物問屋に三河屋と云ふ富有があつた。主人の卯兵衛は身代に何不足こそないがたゞ不足は子のなかつたこれのみ苦にして居たが、妻のお安が、十幾年振で始めての姙娠。夢ではないかと家内中の大喜び。其中無事に十月を過ぎて安々産み落したのは、玉の様な可愛らしい男の子。福太郎と名を命け掌の中の球と夫婦の者は育てゝ居る中、福太郎は早くも七歳となつた。卯兵衛夫婦は今までは幸ひに、病一つ生じたこともなく、育てゝ來たが、猶も此先も

何卒安穩に成長させたいと、丁度十一月十五日七五三のお祝ひであるので、仕度萬端調へ、福太郎は元より供の一同にまで、今日を曠れと着飾らせ、卯兵衛夫婦も共につれだつて、明神へお詣りにと門を出るとたんに、福太郎の足に解つたものがある。福太郎は、

「何か落て居るよう」

と言つて何心なく拾ひ上げたのは、一の風呂敷包なので、父の卯兵衛は、

「ドレ何だ――見せな」

と言ひながら件の風呂敷包を受取つて中を開けて見れば、品もあら

ふに、祝ひに行く出先きだと云ふのに、風呂敷包の中なる品は、袈裟一着、珠數一連。卯兵衛は見るから直に顔の色を變へ、

「サア昔な歸んな〳〵。今日のお參りは中止だ〳〵」

と一同を引つれて家へ歸つて來たので、妻は夫に對ひ、

「お前さん何故そんなに氣にするのです」

「莫迦！これが氣にせずに居られるか。これがお寺詣りにでも出掛ける處なら、まだしもだが、將來を壽く祝ひの神參りに袈裟や珠數を拾つて緣起がいゝと言れるかえ！ア、福は可哀想だ。どうせアノ子は長命はしまゐ。吁。乃公達夫婦には子供は授つて居ねへのかし

らん」

と大層鬱憂ぎこんで了つた。處へ折よく三河屋の店頭を通りかゝつたのが、太田蜀山人目早く見つけた、卯兵衛の舍弟の萬吉。周章て飛んで出て、

「先生〳〵お願ひがムいます。只今兄の卯兵衛が悴の福太郎の七歳の祝ひで、明神にお參りにまゐります途中、これ〳〵云々」と袈裟と珠數を拾つた噺をして、

「何卒兄の心持の恢復ます樣何とか巧い先生のお工風を願ひたいもので」

と折入つての頼みに、蜀山人、早速の頓智、傍の硯箱を引寄せ懐紙の皺を伸し、さら〳〵と認めた、一首の狂歌、

けさ拾ふころも霜月十五日
この子の年は珠數のかづまで

と祝つて遣りましたので、卯兵衛はこれを見て結ばれた氣は、解れ大層安心をいたし喜びました。果して福太郎は、其後七十幾歳の高齢を保ちました。

四　一休破戒の頓智

一休和尚は其身精淨の體を持ちながら、性來至つて蛸が好物でございましたが、或日いと徒然の餘り、小介に吠咐て蛸を購求に遣はしましたが、生憎其魚屋に蛸がなかつたので、彼の小介は此處よ彼所と探し歩ゐて甚く時が遅れたので、一休和尚最と〻待わび、

此たびは急ぐと云ふに長袖の
蛸の入道みちのおそさよ

と詠み玉ひて今か〳〵と待かねて居たる所へ漸くのことで、彼の小介は四五はいの蛸を買ひ求めてまゐりました。一休之を見て大に打喜び、直ぐさま料理にとりかゝらふと思ひましたが、否や待て暫し

此蛸このまゝムザ〳〵喫はんことといと無慘の事である。我れは出家の職分イデヤ引導を渡して呉れん、

手觀音蛸手多　斬懸ニ柚酢ニ拜ニ如何ニ
州一咲天然別　他禁戒任ニ老釋迦ニ

と斯樣な引導が濟みますれば、一休和尚ヤレ引導はすみたるぞ。イデ此上は火葬にせんか將た土葬にせんか。否や〳〵水葬にせんと手取り足取り八本の手に〳〵沐浴させ、柚酢を掛けましてこれは入道坊主の共喰ひ近頃珍らしや甘やと、ムシヤ〳〵食されました。軈て食ひ終つて口を拭ひ、何食はぬ顏して、或る旦那方の許へまゐられ

ました處が、餘り澤山に酒を薦められッイ飲み過し、尾籠にも开處へ小間物屋の店開きをしたのはまだしも、元より蛸は不消化物、先刻喰つた蛸が正でゾロ〳〵と出たので、何がさて旦那方を始め家人一同は愕きもし呆れもし、中にも旦那は、不興の顏をして一休和尙に對ひ、

「これは怎うした失態。和尙は日頃、佛の如く精淨の高僧とのみ思つて居りましたが、蛸を啖ふとは、偖ても〳〵人は見掛けによらぬもの――和尙も獨且、腥坊主のお仲間でござるな――」

と打ち笑ひ嘲けり罵りましたが、一休和尙一向愕ゐた容子もなく至

つて平氣で、

「否や〳〵何も我は蛸を食つた覺えはさらにないことである。併し今現に斯く出て見ると爾思はれるのも強ち無理もないが、決して蛸は啖はぬ。喰はぬものは何處までも啖はぬのである――」

と答へたので、旦那は心の中で餘りと言へば白々しい小憎らしい坊主と少しく怒りを帶びた口調で、

「さりとは御坊にも似合はぬ、執拗な暗い辯解なる哉。今現に面のあたり、此如く御坊が吐き出した蛸を、マザ〳〵しい、啖ぬとは何事偖て〳〵見下げ果て申したり」

と愈々嘲ければ、一休和尚更らに怯びれず、

「卿等は物の道理を辨へぬと云ふもの。假しや只今我が口から蛸が出でたりとするも、決して拙僧が啖はぬと云ふ確かな證據を見せて遣はす程に拙僧と一緒に來れ」

と旦那を始め一同を引つれ、百萬遍の處に行き、善導法然の畫像を見せて、

「アレ〳〵見られよ。善導敢て阿彌陀を喰ひしことなきであらふに口より三尊を吐き出されてあるではないか。善導大師でさへ食はぬ物の口より出づるを制し難ければ、況して拙僧の如き者食はざる蛸の出づるも亦た詮方なきことではないか」

と早速の頓智に、一同は思はず感心して横手を拍て、一休和尚の凡僧にあらざるを知りました。

五　曾呂利の乾袋

一日曾呂利新左衛門茶器の御鑑定の役を勤め大層殿下のお氣に適ひ早速御面前にお召に相なり、御機嫌殊の外麗はしく、

「其麼に新左よ。今日の殊勳予も滿足に思ふぞよ。依つて充分なる褒美を與らしたく存ずるが、慾じ此方で彼これと見計ひて物品を與

らするよりは、何なりと、其方の身分に相應しき物を、其方の器量一杯に望め。必ず叶へてとらするぞ」

新左は此仰せを承り潑と鰭伏し心の中には、今日こそ殿下を愕かし奉らんと、種々勘考いたして居るので、性急の殿下は焦かしく思召して、

「コレよ新左。遠慮に及ばぬ。今日の功は格別である。何なりと望め」

と再度の御諚に、新左衛門やをら頭を擡げ、

「事々しき何の功勞も無之に再度までの有難き御諚を蒙り、新左身

に取り此上の面目はござりませぬ。されば此上何々を望みまするは勿體至極もなき次第。然は去りながら、一物をも望み申さぬ時は却つて殿下の御心に、背き奉るの虞れあり。斯るが故に、聊か望みを申上げ奉りまする」

と言葉は至つて謙遜。所望は極めて僅少の如くであつたから、殿下は心に幾分か怪みながら、

「決して氣遣ひ無用じや。さるにても平素の慾張にも似もやらず、神妙な心底、聊かと申さず、澤山に望め」

「然らば、お言葉に甘へ、望みと申すは……」

「何じやな」

「願くば二個の大乾袋へ這入りまするだけ、米を頂戴致したく此儀所望にござります」

餘りの小さい樣な、新左衛門の所望に、殿下は噴飯たまひ、

「何じや。乾袋に這入るだけの米を呉れと申すのか。さりとは、餘りに不思議千萬、其方の慾張り性にも不似合な、偖ても寡慾の願かな。新左衆人が笑ふぞ。餘り度量が狹いぞ。左樣な、客臭いことを申さず、モツと、大きく望め」

「尊命有難くはござれど、新左の望みそれにて充分——にござります」

す」

「強っての望み好し〳〵聞とゞけ遣はす。何時にても其方の心任せに、二つでも三つでも構はん。成べく大きな乾袋を持參し、米稟にまゐり、米を詰るだけ入れて參れ」

「速かのお許し謹でお禮を申上げ奉りまする。就ては、曾呂利新左衛門の何時、米稟へ參り候も彼これ面倒のござらぬ樣、御役所向衆より、御藏方へお觸れ出し置を願上置まする」

日本六十餘州を掌握し。それにも飽き足らず遠く朝鮮明國へまで手を伸しつゝある大腹中の太閤殿下だ。新左衛門と恁んな僅かばかり

の、約束を結んだ事なぞはいつの間にか、跡方もなく忘れ果てゝ了つた。處が新左の方では忘れる處ではない殿下を愕かして呉れんと約半ケ月程は、多人數の袋張りの職人を傭入れ、目のまはる程の忙殺さで、漸と出來に及んだのが、二個の乾袋それは〳〵、其袋の大きい事は、袋の重量ばかりも大の漢子が五六人も掛らなければ持揚げられぬのでも大きさは大抵知れます。偖て其二個の大乾袋をヤツショ〳〵で、御城内へ運ばし、其身は殿下の御前に伺候して、

「今日は愈々、曩つ日、御許を蒙り、拙者に賜はるべき米、二個の乾袋出來仕りましたれば何卒御約束の如く頂戴に推參仕りま

した」

太閤殿下は忘れた記憶を呼び起し、

「爾であつたの、好し〳〵、其二個の袋は定めし持參致したであらうが、更らに見へぬが、懐中致して居るのか」

曾呂利は頭を左右に振り動かし、

「否や〳〵袂や懐中に這入り居る如き、矮小なる乾袋にてはござりませぬ。餘程大きうござれば、到底、新左の如き非力の腕肩に乗り申さぬ因つて拙者の召使人六人餘りの肩に擔かせ、既に其袋はお藏方へ差廻し置きました」

曩日は、餘りに小さく言はれて愕き、今日は又意外に大袈裟に吹かけられ、殿下は少しく不審に思召したなれど、たかが袋の事だ程の事も仕得るまゐと別段深くは糺さず、

「好し〳〵、甚麽に大きくとも、袋は嚢であらふ、這入るだけ充分に詰め込んでまゐれ」

「ハヽ、有難き仕合せ、然らば頂戴仕りまする」

と御前を辭して、お藏方へ來り藏奉行に面會を求めたので、奉行も殿下の腰巾着お氣に適りの新左の事故、早速に出迎へ、

「コレハ〳〵曾呂利姓、拙者に御用の越き有之わざ〳〵の御來臨御苦勞至極に存じまするシテ其御用のお趣きは……」

と奉行の言葉の尾につき、

「お尋ねに從ひ早速用向の次第申上る、實は先日、拙者事聊か勳功これありしを殿下樣殊の外なる御賞美遊ばされ其御褒賞として袋に二つの米穀を賜はりました。就ては今日其賜はりたる米穀頂戴に罷越したる次第、何卒速かに御渡し下さる樣……」

と慇懃に申出でられ奉行は不審の眉に皺寄せ、

「偖ても近頃笑止の御咄し、殿下お傍去らずの御身樣に似合はしからず、僅に米二袋を御受取りに態々の御來駕とは訝かしく存ずる」

「これは又、怪しかる事を承るもの哉、訝しいとの仰せは、お役向の衆より未だ足下様へ何の御沙汰無之と覺え候。併し拙者、八幡詐言は申さぬ。確に殿下より二つの乾袋に入るだけの米穀頂戴致したのでござるがお役柄念の爲めとありや、何卒急速、殿下様へ御伺ひなされたし」

「否とよ、決して御身様の申さるゝ事、露疑ひ申さぬ。なれど餘りにお望み御輕少ゆへ審しきと申上たるまで、元來僅かばかりの乾袋に二個の米、役向きより何の沙汰とてはござらぬが、お身が殿下に二袋を米お乞ひ奉りし噂は耳に致したる事有之、サ、御遠慮なくお持ち歸りあれ。只今小奴に申付け、俵の口を開かせ申す間、暫時御待ちあれ」

「否々其御手數には及び申さぬ。拙者の從者數多召連れ參りたればお心遣ひ御無用に願ふ……ソレ頂戴に及べ」

と從者を顧み下知を傳へた、

豫ねて手筈は定められて居たのだ、從者の面々は携へ來つた、件の乾袋を擴ぐるよと見るまに、大阪名代の米庫の中にて、最も大なる庫に山の如く米穀の積み込みあるを撰んで屋根の上よりバッサリと、二棟の倉庫に冠せた。最前より、餘りに突飛な馬鹿氣た有樣に

藏奉行は呆氣にとられ、暫く茫然と爲すがまゝに默して眺めて居たが、軈て、

「曾呂利姓、自體斯樣な眞似を致し、何をなさるのや、拙者甚麽にも解しかね申す」

「異な事を承はるもの哉、何をなさるとは、自體お奉行のお言葉とも覺えず。只今何とお言やつた。御遠慮なくお持歸りあれと仰せあつたではござらぬか――御言葉に從ひ二袋の米穀持歸るのでおじやるにお咎めらしい事を仰せられしは、新左こそ如何にも解し難ね申す」

「成程二袋の米お持ち歸りあれとは申たるに相違ござらぬが、然りとてもこれは又た餘りの企み方……此儘拙者一了簡にも罷りならぬ事でおじやれば、御迷惑ではござらふが殿下に御伺ひを致すまで、暫時お待ち下さる樣に……」

「奉行とも言はれる足下の口から、持ち歸れと一旦許して置ながら今さらに奇怪なお言葉とは存ずれども折角のお賴み……可し相待ち申でござる」

散々皮肉を言はれ恩に被せられ、奉行は這々の體で急ぎ登城をなして、殿下に斯々云々と言上に及んだ、

奉行より委細の報告を聽た太閤殿下、偖ては又しても、曾呂利の奴めに、一杯喰はされたかと、道がの太閤も暫く無言で居たが、

「譬へ甚麽に大なりとも、袋は袋なり、約束じや、致し方がない。新左に袋に這入るだけのものは、悉皆與へても苦うない」

と許可が出たので、奉行は再び急いで立戻り新左に向ひ、

「殿下に御伺ひ申たるに約束じや、袋に這入りしだけは持ち歸れとの御上意、サ、御持ち歸りありても、苦うござらぬ」

「爾あるべきは當然の事でござる、らば頂戴仕る」

と召し伴れ來つた、從者人夫を督し、ドシ〳〵と遠慮會釋もあらばこそ、引出すは、引出すは積み込むは、積み込むは、出しも出たり山と積だる大八車に三百五十幾回と運んだので乾袋のかぶさつたさしも大きな米庫二戸前は、米一粒も餘さず空虛となつた。

六　一休五戒問答

當時の智惠者と呼ばれた、蜷川新左衛門が紫野大德寺に來られ、一休和尚と佛法のお話をいたされ、和尚は蜷川に對はれ、

「何と新左衛門殿、歎はしい事ではござらぬか、近頃の出家は兎角に志薄く、昔時は、御佛は五百戒をさへも保ち給へりと聞く、さ

らばせめても、現の僧侶は五戒だけも保て貰ひたいものである……」

「甚麽にも左樣で、兎角破戒の僧の多きは歎はしく存じまする」

「併し世上を廣く見渡し深く察するに、天下にありとしあらゆる物皆な一として、五戒を保つものはないのである。今手近く此の僅か尺には足らぬ扇子さへも、五戒を被り居る況して僧侶、生きとし生けるものとして、五戒を保ち得ぬは道理のことで、亦た是非もないことでおりやる」

「なか〳〵に不思議な事を承るもの哉、此の扇子が何とて五戒を破り居りまするとや、こは又た、例の和尚の輕き出來口にて候はん

「否とよ、輕口にはござない、眞の事にて候」

「然らば拙者、一々扇子の五戒破りの理由一々問ひまゐるべければ和尚聞かしめ給はれ」

「さあらば一々問ひ給へ、答へ申さふ」

「問ひ申さん　如何なるものか、之れ扇子の殺生戒の破戒にて候や」

「答へて曰はん　竹截りて骨とはなさゞるや」

「問ひ申さん、如何なる事か之れ扇子の偷盜戒の破戒に候や」

「答へて云ふ　虛空の風を偷むを以てなり」

「問ひ申さん　如何なるものか之れ扇子の邪淫戒にて候や」

「答へて云ふ　要と要と合はざるや」

「問ひ申さん　如何なるものか之れ扇子の妄語戒にて候や」

「答へ申さん　畫空事を描くを以てなり」

「問ひ申さん　如何なるものか之れ扇子の飲酒戒の破戒にて候や」

「答へて云ふ　開いてざらんや言ざるや」

と五戒の問答首尾結了して、

「何と新左衛門殿、之れは扇子の五戒を破れるものにてはござらぬか」

「之は今に始めぬ御明答、又た一入面白き御答、如何にも感服致し

ました。但し其五戒の中、偷盗戒の御答へに對し、聊か不審申たき事がござる」

「して其御不審とは如何なる事にて候」

「开は外にてもござらぬ、古語に、

扇是日本扇　風不二日本風一

とか申されまするが、今此語に據つて考へますれば、扇子はこれ日本の扇子を動しましても風は日本ばかりでなく、所謂千里同風と申しますれば、其盗むと申すは、抑も如何なる所以に候か不審と存じます」

と、滑稽半分に詰るを、一休和尚宛然と、

「新左衛門殿……」

と呼びまするのを、蜷川は、

「ハイ……」

と答へるや否や、一休即座に一首を詠んだ、

春もなく香もなき人の心こそ
呼べば答ふる主もぬす人

と詠まれたので新左衛門大に感じ入つて、

「奇妙即座の御口かな、あはれ願くば先刻よりの始終の問答、一筆

書付けて賜はりたしと請はれましたるに、一休も早速快諾して、一筆走らせ書いて與へたとの事、寔に咳拂ひも珠玉となり輾轉立板をまろぶが如き、頓智即妙如何にも敬服の至りであります。

七　蜀山人と女乞食

蜀山人所用あつて淺草に赴き、觀音堂の裏手を通つてまゐりました今でこそ公園の裏は千束町だの田町だの立派な町並みになつて居りますが、其當時ときたら、其名の通り一面の田甫で、先生寒風に吹かれながら、頭巾を眞深に被つて震へながら开處を通られると、草

の影に何やら呻る聲が聞へるので、近づいて見ると、一人の女乞食が癇にでも閉ぢられて呟々唸つて居るのでした、先生は直ぐ傍に駐け寄つて、懐中して居た、萬金丹を與へ、其上若干の金を與へて立去られましたが、其時の狂歌が、

北風は今日はな吹きそいたづらに
虫も被れり鷹もかぶれり
救ふべき力なければいたづらに
萬金丹をくれてこそ行け

八　曾呂利と利久の喧嘩

曾呂利新左衛門と、千の利久宗匠とは大の仲惡で恰で犬猿も雷ならざる間柄でありました。ある時、利久宗匠の許へ、太閤殿下のお從伴で新左衛門も一緒に呼ばれた、處が利久は、怎うした譯か、殿下に御挨拶を申上げ、其席を退いたまゝ、何時まで待つても再び出て來ないので、新左衛門は、突然と庭に躍り出で折柄の眺めとなつて居た、降つむ白雪を、散々に蹴散らしお庭の風致を滅茶〳〵に蹂躙して狼藉を極め庭中を荒し廻り、果ては樹々に降りつむ六の花をも

振り落して了つた。

此時漸く主人の利久宗匠出で來り、新左の亂暴を見て、心中酷く怒つたものゝ、遉がに下劣者の樣にはしたなく怒鳴れもしないので、

人ならば石の上をば行くべきに
雪を踏來る犬にこそあれ

と口吟んで、新左を四つ足に做らへ罵つたが敵手は曾呂利だなかなか閉口する樣な男ではない。利久の言葉の終ると直に少の馳みもみせず、

ちん座敷眺め愛する御亭主は
どうせ四足仲間なりけり

とやりかへされ、利久は口惜しく、何か今ま一首と考へつゝ、口をもが〳〵させて居る中猶も利久攻擊の狂歌を連發して再た一首、

ちん座敷犬の友達訪ひ來り
雪を蹴立てゝ遊ぶなりけり

早速の頓智は、利久なぞの遠く曾呂利に及ぶべきでないと、太閤殿下は思召され、甚く感心せられ、利久とても御寵愛の一人何とか此機を利用して、兩人を和解させんと、思案最中、不圖胸に浮んだ一首の狂歌、

珍らしや犬と狸とが喧嘩して
猿が仲裁仲を直せよ

と圖場拔けた殿下のお言葉に利久も新左衛門も互ひに我を折り、殿下の御前に跪いて、爾來兩人共に仲交く水魚の友となりました。

九　蜀山の淺間の狂歌

蜀山人ある年信州善光寺へ御參詣いたされまして、其歸途草津に廻られ淺間の麓をおまはりになつた。此山は天明三年に山燒がしてからだ間もないことゝて、彼方此方に燒石燒砂が溜つて居ると云ふ

始末なので、先生は、

「これはまるで火の玉の上を踏んで歩く樣なものだ」

と仰有つて歩いて居られましたが、その時丁度風の工合で噴火の烟が濛々と上から吹き下ろして硫黄の臭ひ匂ひが劇しく鼻を衝ゐてくるので、普通の人なら鼻を摘んで逃げ出す處を遣がは先生どこまでも頓智的の風流、

淺間山なぜその樣にやきなんす
いはう〳〵がつもり〳〵て

と洒落ました。

幽靈問答一休三寸舌頭に釋迦を弄す

一日或人一休に問ふて申するやうは　或「聞く所に據れば人は死して躰はなくなり果つるとも魂は此の世に留る由でござるが若しも左ることならば假令其躰はなくとも魂だにあらば其人は其儘此の娑婆に殘り居て物語りなどもあるべき筈でござる何故なれば人として魂は其本領でござれば此の本領の遺ッたる人の物語りなどあるべきは固より其所でござる左るに魂の尋常の物語りなど聞いたことなきは一ツの不思議でござる且つ又一方より考へて見まするとは人は地獄或は

極樂へ行いて來世の苦樂があると云ふが若しも魂が行かねば其苦樂も感ぜぬことでござらう躰は葬りたる墓地に何時までもあるものにて嘗て地獄極樂へ行いたと云ふ話も聞かぬことである左すれば地獄極樂へ行くと云ふは魂の謂ひで躰の謂ひではござらぬ然らば此の娑婆に魂の留り居る筈もないことである若し猶ほ娑婆に留り居るとしますれば开は魂が二ッなければならぬことでござる一人の魂が二ッあらう筈もないとである既に一ッとすれば又疑があることでござる开は亦何故と申すに彼の極樂に行いて佛に成ッたる者は其極樂の蓮の臺の快樂が數々多くて此の塵埃の娑婆に來やうなどゝは露毛程も

思はぬこと娑婆歸りなどは全く打ち忘れてしまふことでござりませう又彼の地獄へ行きし事などは日夜の呵責に魂の骨身は碎かれ手足は疲れ果て中々此の娑婆に來る間隙などはなきことでござらうに世に幽靈などゝて死したる者の來りて樣々の事を言ひ並べて怨する等の事を承るが這は抑も如何なるゆゑにや和尙殿の智識で御示し下されと云へば一休之を聞いて申すやうは 一「左れば其事にて候へ我れ未だ死して見ねば其事は委しくも存じ申さぬことでござる我等も若き時チト談議など聞きたることの侍るが眞か僞か知らぬ魂と云ふものがあッて佛とも成り鬼とも成るげに候が其くせものが閻魔王と

やらんの前にて公事奉行の手に渡り娑婆にて作りし罪を鐵とか銅とかの帳とやらんに附けて置き之を午頭馬頭等の獄卒どもの鬼に見せて誰れ〳〵は是れ〳〵の犯罪であれば急ぎ此の帳簿に由りて呵責せよと云ふ命が下るとか申すことで是れから赤靑等色々〳〵の鬼共が之を受取りて樣々の責めに逢はすのであるさうでがなござる而て其娑婆にて犯せし數々〳〵の罪ほど之を責ると云のでござるが幷は亦何うして之を責むるか中々〳〵に責め盡されやうとも思はざることである先づ聞き給はれよ拙僧此頃一首遣つて除けました其狂歌は斯樣でござる

作り置く罪が須彌ほどあるならば

閻魔の帳に附けどころなし

と斯う作つた狂歌で見れば鬼と云ふ者も實は鈍物である釋迦が一の經文は皆な嘘八百をも打越え嘘八萬の皮をもてかためたものでござる而して有るかと云へば無しと說き又無きかと云へば有ると說く實に顏憎くの御坊でござる拙僧又一首ござる

釋迦と云ふいたづら者が世に出でゝ
多くの人を迷するかな

と斯く出來ましでござる如何でござるかと云へば彼の者も亦大いに感に入りましたさうでござる如何さま能く悟り開ける問答でござります。

一休終身の一大失敗

抑も一休終身の一大失敗とは何であるか至極たはいもないつまらぬことのやうで至極肝要のことであれば努め忽には爲し給ひぞ或る一年の事十二月の末つ方偶々東山の吉田となん云はれまする所へ參られましたが开が歸るさに今出川口の河原を過られまするに不圖見れば赤躶なる乞食が伏して居られました一休は一目之を見てヤレ不憫のものやと思召されまして身に纏へて居る小袖を一重脱いで之を與

へられました去れば一休は心の裡で竊かに思ふやうは彼れ定めて打ち喜ぶことであらうと想ひましたるに案に相違して彼の乞食は少しも喜ぶの氣色なく突然ット手を通されますれば一休乞食に向ッて云ふやうは 一「偖ても汝は不思議なる乞食ではないか僅かに一錢だに貰はゝ難有しとて伏し拜むは乞食の習慣であるに今汝は一重の小袖少しも嬉しくはないか偖て〳〵奇妙な乞食であると申せば彼の乞食の云ふやう 乞「御身は我れに小袖を呉れて嬉しくは思はれませぬか」と答へますれば一休はハタと手を拍つて云ふ「一偖ても我等誤まりて一大事の悟り茲であるぞや如何さま汝は唯だの乞食にてはよ

もあらじ汝一言の敎へ我等の愚をしも覺しぬること最と〳〵嬉しきことであるとて目を閉じ掌を合せて霎時伏し拜みて居りましたるに良々姑くにして目を開いて見ますればアラ不思議や彼の乞食は何地へ去りけん跡方も見えず唯だ小袖ばかり跡に殘して居りました。

頓智噺終

274
872

大正三年六月一日印刷
大正三年六月五日發行

定價金十錢

東京市本所區元町六番地
編輯兼發行者　高橋友太郎

東京市神田區松住町五番地
印刷者　菅井十一郎

東京市神田區松住町五番地
印刷所　碇文社

不許複製

發行所　東京市日本橋區若松町四番地
電話浪花四八六二
振替東京一〇六八
春江堂書店

終